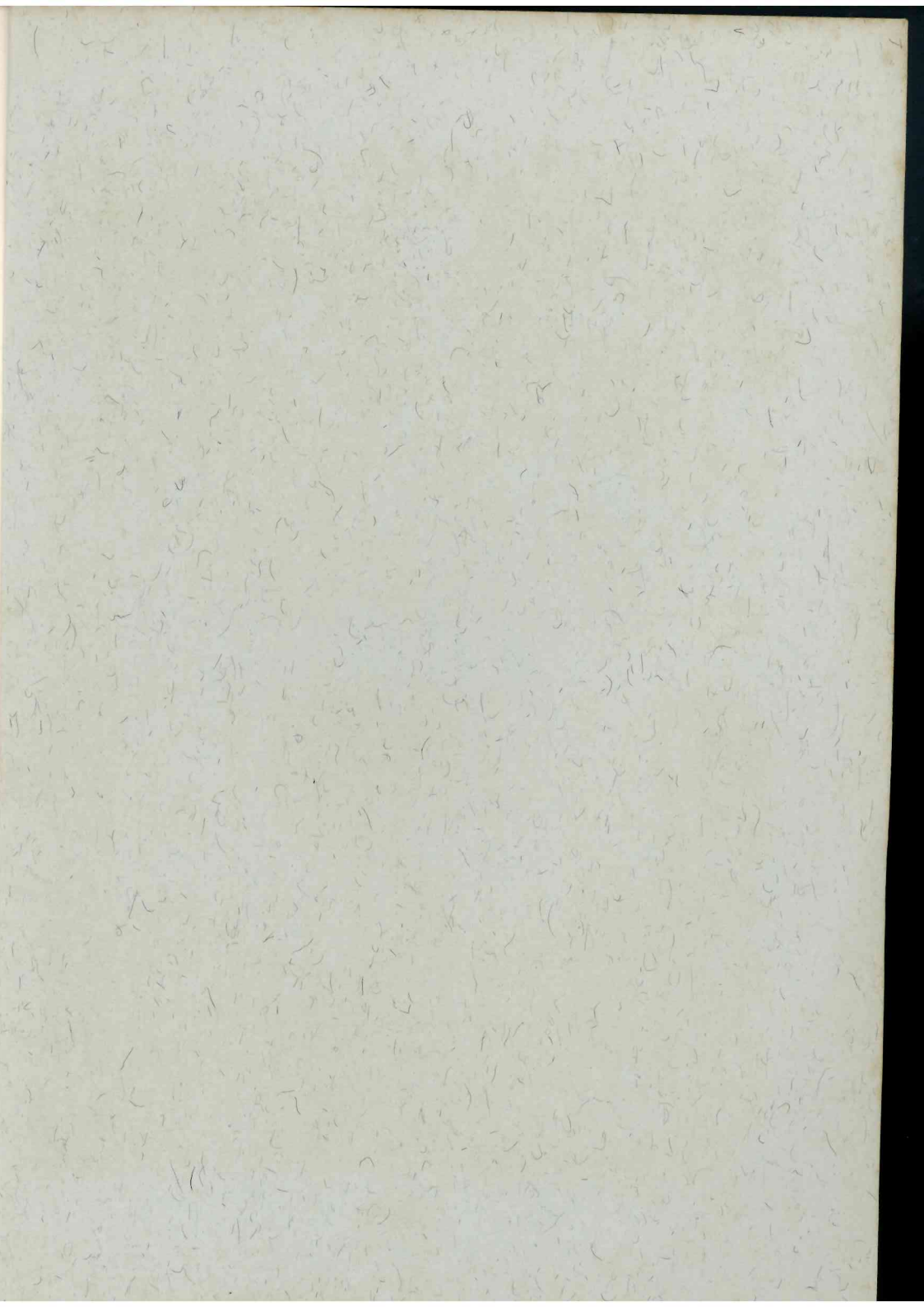


成城大学国文学部六回生
昭和五十年首発行

花信風

第八号

花
信
風



Handwritten text in the upper right section, including the characters '花', '信', and '風'.

Handwritten text in the lower right section, including the characters '花', '信', and '風'.

目次

私の自然主義	高田瑞穂	1
戯作いろはかるた	高田瑞穂	3
花	田中克己	6
母の里	池田勉	8
健康	栗山理一	10
「老年」雑感	坂本浩	12
佐々木邦の全集を読みながら	山田俊雄	15
近況	本多弘子	21
河童	土方美佐子	23
無始、無私、無視、夢死、無死、虫	木全麻智子	26
近況報告	高橋睦美	27
皮細工の小物作り	高橋和子	29
お兄ちゃん	紫藤邦子	31
おいしいものをおしく	武樋路子	34
雨の日の雑感	八木都久子	35
趣味	牧野由紀子	38
P.T.A.コーラスに返り咲いた私	横山育代	39
雑感	近藤由紀子	40
詩 五篇	佐藤美智世	41
近況	森川庸子・堤信子・石山正美	
	長浜宏子・佐々木美岐・鹿野正子	
	本谷俊子・坂崎紀美子・梅北淳子	
	若菜東雄・林節子・重見泰子	
	小泉健二・堀内久美子	
三千子ちゃんですよろしく	きまたまち子	
住所変更		
編集後記		

私の自然主義

高 田 瑞 穂

私は現在、私の自然主義を信じ、そのイヌムに即して生きております。特に「私の」という勝手な限定を付けてゐるのは、それだけの理由があるからです。

私は、人間と人生とに關する一切の認識は文学、広義の文学から学びました。その結果私の到達したのが私の自然主義なのです。

「私は私で、自分の気に入った事を勝手にしてゐるのです。それで気が済んでゐるのです。」(「Resignationの說」)

鷗外がこう告げたのは、明治四十二年末のことでした。

「代助は、自己本来の活動を、自己本来の目的としてゐた。歩きたいから歩く。すると歩くのが目的となる。考へたいから考へる。すると考へるのが目的になる。それ以外の目的を以て、歩いたり、考へたりするのは、歩行と思考の墮落になる如く、自己の活動以外に一種の目的を立てて活動するのは活動の墮落になる。従つて自己全体の活動を挙げて、これを方便の具に使用するものは、自ら自己存在の目的を破壊したも同然である。」

これは、漱石の「それから」の主人公の表白である。漱石が代助の口を通してこう告げたのも、明治四十二年のことでした。漱石のこの作品に強い感銘を受け、四十三年四月に刊行された『白樺』創刊号に「『それから』に就て」という評論を掲げたのが武者小路実篤。その実篤は、翌四十四年四月の『白樺』誌上において、自らの人間観を次のように告げています。

「自分は自分の力でものを美しく見たり、醜く見たり、喜んだり、悲しんだりするのではないと思つてゐる。さういふ風に作られてゐるからさう感じるのだと思ふ。されば自分がかく感じるということは、自分は或るものによつてかく感じるやうにつくられたりと云ふことだと思つてゐる。」

私の自然主義も、明らかにこの系列に属すると思ひます。しかし、鷗外の暗さ、漱石の激しさ、実篤の明るさは、それぞれ多少の相違があります。私は鷗外ほど暗くなく、漱石ほど激しくなく、そして実篤ほど明るくないのです。私も実篤のいう「或るもの」を信じております。それは神といつても宇宙の摂理といつてもいいのですが、私はむしろ真理ないし道義と呼びたいのです。「真理こそは一すぢに 我がとこしへの命なれ」

校歌の一節を思い出して下さい。この道を行くものにとつては、成功も不成功も、豊かさも貧しさも、好評も不評も、大した問題ではありません。一番大切なことは、自分が自然に歩いている道、毎日行つてゐる事が、おのずから何等かの真理につながつてゐるかどうかです。そういう真理ないし道義に自然につながる生き方、それが私の自然主義です。こういう生き方に不可避の前提ないし根源はエゴイズムの超克ということです。利己主義にとらわれている限り、その人の生に本当の幸福は訪れないのです。エゴイズムの道は、極論すれば窃盜につながります。そういう生き方で、たとえどれほどの大金をつかもうと、そういう人生が幸福であるはずはありません。逆に、エゴイズムを本当に乗り越えた人生は、それがどんなに貧弱な細かい生であっても、おのずから幸福感につつまれてゐるはずで

「幸なるかな心の貧しき人、天国は彼らのものなればなり。幸いなるかな柔和なる人、彼等は地を統べければなり。幸いなるかな泣く人、彼らは慰めらるべければなり。」「マテオ福音書」の「山上の説教」冒頭の一節です。

正しく誠実に自然に生きている限り、その生は幸福であり、その幸福感は全く平等であるという確信——それが私の自然主義なのです。

戯作 いろはかるた

高田 瑞穂

い——命短し 歩めよ歩め
ろ——論より証拠か 証拠より論
は——花は咲いたよ やがて散る
に——西へ行こうか 東へ行こうか
ほ——本の中にも光る星
へ——へそを曲げたぞ 昨日も今日も
と——時は行き 時は止まらず
ち——力は出さず 声ばかり
り——理想は消えて 影ばかり
ぬ——盗人の得意満面
る——類火もらい火 あゝ恐い
を——老いては明日もなし
わ——わかれも楽し

か——神もなし 仏もなし
よ——世の行末を告げる騒音
た——誰も彼も心は重し
れ——歴史の流れ波の間に間に
そ——損すれば得
つ——月は傾く 濁り江の上
ね——年がら年中走りづめ
な——泣っ面にひげ
ら——楽もなし 苦もなし
む——虫が知らせる道の果
う——浮き世は憂き代
る——みの字は消えて今はなし
の——蚤にきゝたい人の味
お——己を知らぬ かつこよさ
く——草もしおれて色もなし
や——安物買に大わらわ
ま——待てどくらせど来ぬ光
け——剣もほろゝの人の群

ふ——文は書けない　チャアネ　電話で
こ——米もなければ家もなし
え——駅弁も高くて買えず
て——手をひいて老を導くもの　あゝ今はなし
あ——秋来れば　冬は真近し
さ——笹の葉ゆらゆら　うらやまし
き——聞く耳持たぬ　出直せ
ゆ——夢のない無我夢中
め——目に涙　世界はうるむ
み——道は速く　身は独り
し——知る喜びを知らぬ哀れさ
ゑ——円満は美
ひ——貧乏を誇れ　誇ろう
も——門前にずらりと並ぶ危険信号
せ——生徒も知らぬ　先生も解らぬ
す——砂煙り道行く人に降りそぐ
京——京の夢消えてはかなし

昭和五十年一月四日夜作　六十六翁　瑞生

付記　来客の帰られた後、酔いに乗じて一氣に作った文字通りの戯作

花

田　中　克　己

春が来るとわたしの小さい庭にもいろいろな

花が咲く

忘れてゐた宿根草チゴユリ、エビネ。

飛んで来たムラサキダイコンに

殆どおぼはれてプリムラの二株、三株。

皆がいやな花といふ蛇の舌に似た天南星の花

も咲く。

あたかも入学の季節で孫ほど若い大学生が
胸をふくらませて入って来る。

わたしは懇々と学を説くが

ねむけさましてピリッ、と辛い言葉もまぜる。

遅刻した子は叱りつけ会釈しろという。

いやな先生と露骨な表情をする子がゐる。

嫁に行つてみる、こんなぢやすまないぞ。

わたしは遠謀深慮をこめて教へてゐる。

おかげで学の深奥なぞどこかへ行つてしまふ。

女子大学生亡国論をもう一度

テルオカ先生は説いてくれないかな

これが新学期の感想で

まもなくわたしの庭にリラの花が咲くと

連休をわたしはのどかにすごす

これが十数年の慣はしです

古きミシズ・アンド・ミッセズたち。

母の里さと

池田 勉

初めて汽車に乗ったのは三歳か四歳のころであつたように思い出される。汽車は山陽本線の加古川から北上して西脇という村まで延びて来ていた。今でこそ西脇も大きな機業地になつて市制をしくまでに発展したが、そのころはまだ村はずれの小さな停車場にすぎなかつた。私の生家からこの西脇まで南へ三里あまりの田舎道を、母の膝に抱かれて人力車でゆられて行つた。進物などを入れた信玄袋を足もとに置いて、人力車の車輪はまだタイヤでない鉄輪のはまつたものであつたから、小砂利の多い田舎道では金属的な音をたててきしみ、ひどくゆれた。

初めて見る汽車の機関車は見あげるばかり大きく、まっ黒な胴体の黒光りのした恐ろしい幻の生きもののように眼に映つた。レエルに並んだ鉄輪の間からは白い蒸気が音をたてて吹き出していたし、細長い煙突からは絶えず鳴動して黒煙を空にふきあげていた。発車時刻に近かつたのであろう。箱のような客車が三つばかり後に続いていた。車中はすいていたので、母と並んで私は窓側に坐つて、窓の外をもの珍しげに眺めた。汽車が速力を加えてゆく、私は不思議な事件に気がついた。幼い私にとって、まさしくそれは事件であつた。沿線に一列に立ち並んでいる電柱が、外を眺めている私の窓の方へ、次々に吸いよせられるように近づいて走ってきたかと思つと、私の目の前でスッと流れるように後方へ走り去つてゆく。一種の恐怖と不思議さに私はこわばつた顔をして、母にその不思議さを訴え、説明をもとめた。母はすこし困つたような表情をうがべながら、いろいろ説明してくれたらしいが、私は納得がゆかなかつた。今から思えば、太陽が空をめぐると感じたあの原始感覚にひとしいものであつたのだら

うが。

母の実家は、私の生家から七里ほど南の、隣りの加東郡下東条村小田という村だった。醤油を造る家業であった。道をへだてた前隣りに白壁の高塀をめぐらした宏壮な邸宅があったが、これは本家で造り酒屋だった。母につれて二度ほど訪れたことがある。その新宅にあたるのが母の家であった。主家から一町ほど離れた所に醤油を造る蔵の棟が並んでいた。母の兄、伯父は幼い私を可愛がってこの醤油蔵へたびたび私をつれて行ってくれた。大きな蔵の扉をひらくと、醤油くさい冷やりとした空気が流れてきた。私の背だけの数倍もある高さの大きな桶がいくつも並んでいた。醤油の素のモロミが入っているのだが、もちろんのぞいてみることもできなかった。このモロミは朝の食膳に暖い御飯の上のせてたべると、その味のうまみは幼い私にもわかった。

家の前を水量のゆたかな小川が春の光をきらめかして静かに流れていて、この小川にはシジミ貝が沢山いた。小さい熊手を持ち出して、川底の砂をひっかいて、砂や泥の煙のような濁りがやがて水流とともに消え去ると、そこには大きな黒いシジミヤ、あわい鶯色の貝のシジミが点々として澄んだ水底に姿を現わしていた。私は宝物を見出したような悦びで、水につめたさを忘れて、そのシジミ貝を拾いあげた。シジミ汁のあとの貝がらは洗って乾かすと、オハジキにして従妹たちと陽あたりの縁側で遊んだ。

母はこの里帰りを機会に祖母たちと城崎温泉に遊びに行くことになった。姫路に出て播但線を北上したが、この線路は山に入るトンネルが多かった。トンネルに入ることになると、うす暗い電燈が車の天井にともったが、車の振動でその電燈をおおっているガラスの容器の一つが、はずれて、その真下にいた乗客の頭に落下した。乗客たちは総立ちになり、車掌が走ってきたりして負傷の手当てに大騒ぎになったが、頭にあつく包帯を巻きつけられた負傷の人の、その包帯の白さがいつまでも目にしみた。

城崎温泉は御所の湯であったか、一の湯であったか、そんな名の宿に泊った。温泉の浴場は、子供の私には湯槽が深すぎたし、また湯が熱すぎた。私は身体を沈んでしまいそうなの深さを怖れて、いつも母の手にしつかりとつかまっていた。浴場の外は松山になっているらしく見え、鳥の啼く声が高く聞えた。二三日たって母たちは人力車をつらねて、日本海岸の名所になっているヒヨリ山に遊んだ。その海辺で私は初めて「宿かり」を知った。山家育ちの私には全く未知の動物だった。宿に持ち帰って洗面器に水をはって入れてやると、巻貝の中からオズオズと数本の足を出して、あわただしく這いまわるこの小動物は、しかし私には興味わるく思えた。

数日して私たちは、ふたたび母の実家へ帰ってきた。疲れていたのか帰途のことは殆ど記憶にない。母の家から帰って行く日、祖母はタンスの抽出しから何か取り出していたが、私の掌の上にも小さな五円金貨を一枚のせてくれた。金色に光る小さな貨幣を私は軽く空にほうりあげては両手で受けとめたりして暫く遊んでいたが、この金貨の行方は、これまた全く記憶にのこっていない。

健

康

栗山理

先日、富安風生翁の芸術院会員就任の祝賀会があり、招かれて出席した。当日は翁の誕生日というわけで、満九十歳の賀宴をも兼ねることになった。私にも祝辞の番がまわってきたが、なんの心用意もないまま、短い挨拶で責めをふさいだ。現存の文学者では武者小路実篤氏がたしか同年齢であり、過去の人でいえば、藤原俊成が数え年九

十一歳まで生きていた。しかしその高齢まで旺盛な作家活動を持続しているという点では風生翁は稀有な例であり、ぜひ一層自愛されて長寿の記録をのばしてほしい、という意味のことを述べた。

古典作家でも西鶴は五十二歳、芭蕉は五十一歳で亡くなっている。私は今年で六十六歳であるから、西鶴や芭蕉に比べると、はるかに生きのびていることになるが、風生翁に比べると、その息子さんくらいの年齢で、一世代は若く。

このごろしきりにわが身の老化現象を歎くことが多い。「老を忘るべし。されど老を忘るべからず」とは誰の言葉であったか思い出せないが、至言だと思う。しかし、それを身に行ずることはまことに至難である。私は昭和11年に大学を卒業したから、今日まで四十二年間教壇に立ってきた勘定になる。五十代にさしかかるまではさいわい健康で、欠勤の記憶は一、二回しかない。それも二日酔いで動けなかったためで、病気ではなかった。それが十数年前に胃潰瘍をわずらってからは持病となり、すっかり調子が狂い、老化の進行状態も速くなってきたように思えてならない。老化をのがれる術がないとすれば、せめてその速度をゆるめる方法はないものか、それが私に課せられた難問となっている。ただ仕事の性質上、時に多少の無理は避けられない。一昨年夏も二箇月の休暇を利用して、小さな本を二冊書いた。朝の涼しい時間という気持ちもあって、毎朝三時半か四時頃に起きて、昼寝も抜きにして夕方まで頑張ってみた。体力の限界を感じてベンをおくと、さすがにぶっ倒れるような疲労が襲ってきた。その時は成城の教え子が私の健康を気づかって、朝鮮人参のエキスを届けてくれたので、それを毎朝口に入れることにしたが、それが私を持ちこたえさせたのだろうと思ったりした。ところが、その後半歳くらいはすっかりへばって原稿用紙に向う気力もなくなりました。やはり無理だったらしい。

間もなく夏が近づいてくるが、今年も一冊引き受けさせられてしまったので、今から体力を養っておく必要がある。さいわいこんどは粒状の朝鮮人参を大量に贈ってもらったのがある。それと胚芽をませて飲むことにしている。また先日は甥が訪ねてきて、不老長寿の効験があるとかいう紅茶茸をくれた。コトカサスの山中に長寿村があり、これを常用しているという。それも飲むことにした。にぎやかなことである。「猿の腰掛」や「靈芝」の類であるか。しかし、私はそれだけでは不安であり、自力で体力を維持する必要があると考え、毎朝体操をすることにした。床をはなれてやる体操はやはり億劫であり、永続しないと、寝床で仰向けになったまま足腰を鍛える運動である。まことにずぼらな体操だが、十分間ほど続けると、うっすら汗ばんでくるし、すっきりと爽快な気分になる。

いったい人間の幸福とはなんであるか。人によりさまざまな答えがある。私も年齢に応じて、この自問自答は変ってきた。しかし、今の心境ではただ健康でありたいという一つの答しかはね返ってこない。これも老化現象のたまものか。

「老年」雑感

坂本浩

芥川龍之介が初めての小説「老年」を「新思潮」に発表したのは、まだ二十二歳の青春期であった。その後十三年間におよんで、苦しみもたえながら創作をつづけ、三十五歳で自殺した。太宰治が第一創作集「晩年」を出版したのは、二十七歳のときであった。それから十三年間、血みどろな悪戦苦闘をした末に、三十九歳になる直前に情

死した。文学の出発期に人生の終極点を見ぬいていた点では、この二人の作家には共通したものがある。だが、あくまで自己を拒否して芸術至上に生きようとした峻厳さと、自己に即して生きの苦悩を歌った甘美さとは、それぞれ独自の特質があるように思う。

今年の五月で満六十八歳になった。この二人のすぐれた作家の二倍近くも生きたことになる。しかし、私には「老年」「晩年」といった実感は浮かんでこない。これは自己を凝視し、危機感を覚えるまで追求することを、とかく避けようとしてきたためであろうか。そうだとすれば、私などに龍之介や太宰などの作品の深い理解はできぬのではなからうか。

毎年毎年繰り返される入学試験というものは、年年の衰えを自覚させられる一里塚である。特に今春は激烈な競争で、簡単な問題の採点を割り当ててもらったのに、終了後はひどい疲労におそわれた。その後一か月ばかり微熱がとれず、全く食欲がなくて、体重も四〇キロをかなり欠くところまで痩せた。その間中、心細い思いに閉ざされて、「老年」「晩年」の実感を味わった。

新聞の死亡欄がまず目につき、年齢と病名とを見比べて、わが身に当てはめ比べたりした。もともと私は病弱の身で、中学時代など五年のところを六年間在学したが、実際学校に行っていたのは四年半足らずで、その他病床に横たわっていた。とても学問などできる身ではないので、奈良の鹿の番人か、養鶏でもやらせてみては、というのが、まわりの人々の結論であった。そのころ特に親しかった友人が三人いたが、三人ともとうの昔に故人となった。み

な私などより頑健であったが、いちばん見限られていた私だけが、どうやら生きのびて今日におよんだのである。

「生は死より尊い」ということを夏目漱石が書きつけたのは四十八歳のときであった。その死の前年、「硝子戸の中」に光る深い味わいを持った一文である。私はこの語句を頭ではわかったつもりでいた。しかし、生と死という全く別種の対立するものを比較し、その軽重を問うということは、ナンセンスであることに、ようやく気がついた。漱石は客観的に生と死とを並べて、自己とは無関係に比べているのではない。この二者を貫く一本の線を、自己の身を賭して体覚しているのである。それまでに四度も胃潰瘍にたおれた彼にとって、死は常に生の延長線上にあるものとして把握されていた。しかも、生命の燃焼の最高潮に死が予告されていた。彼にとって、いっそう奥に位置するものが、その手前にあるものより尊いというのは、むしろ当然であったのだ。

私の生は、それほど赤く燃焼してはいない。線香の火が次第に燃えつきようとするさまにも似ている。消えた刹那に、線香とは別なものになる。そして、その間には無限の距離が横たわっている。どちらが尊いかなど、もちろん比較できるはずはない。そう気づいたとき、私には漱石の偉大さが改めてわかったように思う。漱石より二十年近くも長生きしていながら、このていらくである。

太宰治も芥川龍之介も夏目漱石も、この意味では私とは無縁な存在である。ほんとうに理解できるはずはない作家たちである。だが、理解できぬからこそ、少しでも近づいてみたいという気持ちがあることも確かである。線香

の火が消えてしまわないうちに、「死生一如」という心境に何とか一歩でも接近したい。これが現在のいつわらぬ切実な願いである。それは単なる作家研究といったものを遙かに超えた、私自身の生死にかかわる、より重要な問題だからである。

佐々木邦の全集を読みながら

山 田 俊 雄

今、四十歳ほどになる人々でも多分あまり知らないだらう、この間の戦争が済んでから三十年といふ年月がもう過ぎてゐるのだから、その年頃の人が佐々木邦の作品を、同時代の読者として彼の発表するに従って読んだなどといふことがあるわけではない。

この二三年前から、私は、ちょっと、調べたいことがあって、漱石や鷗外のもので、私として何度目にあたるものか数へてもゐないが、全集でまた読んでゐる。同時に、この両家以外のもっと通俗的な内容の文芸を資料にして同じやうな事を調べて見たくなつた。目下、吉川英治や佐々木邦、大仏次郎などをその旧い方から読み直してゐるのである。

私の調べたいことは、簡単に言ふなら、明治以後の外来語についての調査で、外国語の定着のしかたと、定着する、しないの事情の究明、また他の語との交替の状況を知るといふことである。もともとは、明治二十二年創刊の「風俗画報」に拠つて大正初期までの概況をざっと展望して、「日本語の歴史」(平凡社刊)の第六巻の記述に役立てたことに始まつたことである。

漱石や鷗外はその時代において最上級をなす外国語理解者であり使用者であつたと思はれるので、この両家のものには「風俗画報」の内容よりも遙かに高いレベルの外国語使用がある。だんだん仕事が進むにつれて次第にその中間を埋める資料も必要になつて、前記のやうな、いはゆる大衆文学の方に眼が向いて来た。そしてその一つが佐々木邦の全集であつたわけである。

永井荷風の「ふらんす物語」「あめりか物語」などを始めとする異国文化観察の生活を基調にしたドキュメントとは違つて、佐々木邦の場合は、もっぱら、日本の風土、社会に即して書かれる作品が多い。初期を除くと殆んどが、卒直にいへば、全くのエンターテインメント娯楽で、ひまつぶしに類する。素朴な人情と、健康な倫理観念と、現代風の合理主義が、調和した姿を、さまざまに見せるのであるが、用語の方から見ても、極めて平均的で奇を衒ふことなく、健全な保守的傾向であつたと思はれる。そんなわけで外来語を調べる資料として一方の代表といふ資格が十分に備はつてゐさうに思はれた。

それはともかくも、今、私が外来語調査の資料にランダムに佐々木邦を取りあげてゐるのは、実はたゞにその刊行を知らせた新聞広告の口車に乗つたからではなく、やゝ因縁があつたのである。

少年の頃、佐々木邦を読んだのは、「少年倶楽部」といふ月刊誌によることが殆んどすべてであつた。「苦心の学友」「会権先生」「村の少年団」「トム君サム君」などがそれである。大人の娯楽雑誌にも連載されたものも少くなかつた由に聞かしてはゐたが、私は、それらのすべてに接する機会があつたわけではない。

少年から大人へ生長する頃には、この佐々木邦は、私の脳裡からは消えてしまつてゐた。高等学校生徒の時代、また短かい大学学生の時代には、その淡い諷刺や上品で無害安全な人情話めいた諧謔を、到底単純に味ふに耐えな

かった。むしろ彼の作品は少年時代の回想・追憶の中にのみ光輝を保つ存在になってゐた。

ところが、大学学生のまゝ軍隊に入って碌々として日を迎へ、鬱々として 日を暮らしてゐる間の、ある時、活字には飢渴を感じてゐたものの、むしろ何を考へることさへも億劫な、怠惰な兵営生活の中で、下士官集会所にあって少々の書物の中に、鵜外訳するところのクラウゼウィッツの「大戦学理」、徳富芦花の「寄生木」と、佐々木邦の「愚弟賢兄」があるのをみつけた。佐々木邦のは、集合所備品ではなくて、誰かが持込んだものらしく、記憶では春陽堂文庫の一冊だったと思はれる。「大戦学理」はゆっくり読む閑暇がなかったが、芦花とこの「愚弟賢兄」とは終りまで読んだと思ふ。兵営の中に閉ぢこめられた 人間にとって「愚弟賢兄」は別世界の愚劣な話にすぎず、むしろ私は、その時にその小説が軍隊内に在ること自体を変なことだと思つた。しかし、私は、少年の頃の自分とすでに訣別した 自分をよく自覚し得た。これが 成人する途中での佐々木邦であつた。

ところが、戦争が負けになつて終つて帰つて来ると、世の中は上を下への大騒ぎで、しかもいつ何時^{たゞ}も死ぬかも知らぬ情勢になつた。かつて少年時代を過した仙台へ行つて、知人のついで小遣稼ぎの臨時の受験講座の講師をし始めたら、幼な馴染の年上の友人に遇つた。私の拙劣な講義に聴講者として来てゐたのである。その友人は、陸軍士官学校を経て将校になつて活動していくばかりかの月日を送つてやがて中尉か大尉か何かで廃業させられたのだが、年も若いので、改めて学校にはいり直さうといふことだったが、その口から意外にも佐々木邦の名を聞いたのであつた。

彼が、たまたま静岡県のある所に駐屯してゐた時、近くに佐々木邦といふ標札をかゝげた家があつたとか、その名が、少年の頃の人気作家と全く同じなので、興味をそゝられて訪ねてみたら、ほんたうに、その人であつたとい

ふ話である。それだけのことで、あとは何もない話だったが、戦争をへだてて久し振りに再会した人の口から佐々木邦や「苦心の学友」などの話題が飛び出したのは、いかにも久瀧を叙するにふさはしい氣もした。例の「愚弟賢兄」の文庫本の話を私の方から持出したかどうかは、今おぼえてゐない。そしてその時、佐々木邦は完全に過去の時代にはるか離れ去つたといふ感を一層深めたのであつた。

それから二十数年を経て、講談社が、「少年倶楽部名作選」なるものを刊行した時、私は二人の男の子に、その本を与へた。「苦心の学友」の中の「内藤正三位」などといふことが、私の家庭の中の話題に時折は上る。父が、少年の頃に愛読したものを、子が読むといふのは、ある意味では良き習はしかも知れない、平田秃木訳の「ロビンソン漂流記」を昔のまゝに長男に読ませようとしたら、活字の旧さ、仮名遣ひのためもあるが、あまり愉しげでなかつたのを目撃して以来、特に奨めることを止めてしまつたが、この「苦心の学友」はさうでもなく読み切つたやうであつた。かくして、佐々木邦は、私の家庭では周知の人物になつた。そして私は、佐々木邦の名を、少年の頃とは違つた意味で、心の中に再び抱くことになつた。そして、今や、佐々木邦の全集は、私の外来語調査の資料として現前してゐる。しかも、私の器量に従つた調査の途上で、私は多少の発見らしいことをした。これから述べることはその一つである。

あまり上品なことばではない、むしろ隠語といつた方がよいが、「アメション」といふのがある。この語は、久しく正統的な国語辞書には項目として収められることがなかつた。最近では、編者が、研究者ではあらうが、紳士でなくなつた所為か、小型の学習用辞典にも多くの俗語、品格のない語を掲げて、掲載語の新奇や多さを競ふやうになつて来た。私が編修に携つた辞典としては、あまり下世話にわたるものについてはこれを積極的に採用する理

由が無かったので、かつて一度も項目として掲げたことがない。

しかし、もし、掲げるのなら、それなりの調査をして正しい記述にしなければならぬ。

最近の私の外来語調査といふのも実は、今別に現代語辞典を新しい方針で編修しようといふ計画から発してゐることで、品格のない猥雑な用語であれ何であれ、辞典に収めるか否かを問はず、一応、手びろく調査を遂げて置かねばならない。そこで、佐々木邦の全集にまで及ぶといふ次第であるわけだが、この「アメシオン」もその調査の中でフェイド・アウトして来た品いやしきことばである。

佐々木邦全集の第一巻に「珍太郎日記」といふのが収められてゐる。この作品は、解題を書いた尾崎秀樹の記によると、大正九年一月から十二月まで、その続編は翌年一月から十二月にかけて「主婦之友」に連載されたものであるといふ。全集本に示すところによるとその第二十回の部分に、次のやうなくだりがある。

「アメシオンというのは西洋人じゃない。アメリカへ行つて小便をして来た丈の奴といふことさ」

「成程ね。アメシオンか。そう云えば、あの迫害師は確かにアメシオンだ。如何にもアメシオンらしい額をしてゐるよ。学識が怪しくて言葉使いを知らない上に、始終白面しよふでいながら礼儀作法を一向弁えていない。

紳士の礼を御存知ないというのは夫子自らのことさ。」

ここに出てくる「迫害師は……」以下の部分は、原作品によらないと、率然とはよくみこめない行文だから、それはさし措くが、「アメシオン」をはっきり用い、はっきり定義してゐる。これは、大正十年八月発表のものと推察される。といふのは、この全集本では正統併はせて全体を二十四回にわけてゐて、この二十四回は、もともと大正九年十年の二年間の二十四月に分りふられた筈だからである。

ここまで読んできた時、私は、「アメシオン」が案外に古い語であることを知った。そして、急に他の辞典を調べて見た。

荒川徳兵衛といふ人の編で労作といはれてゐる「角川外来語辞典」に、「第二次世界大戦後、たゞ意味もなくアメリカ旅行する風潮があつたが、これをひにくつたことば」とあるのは、使用始めの時期について大へんを見当違ひをしてゐるので、ここでは論外にしなければならぬが、最近刊行中の「日本国語大辞典」(小学館)は「隠語構成の様式併其語集」(昭和十年六月刊)を引いてゐる。そして、「昭和の初年いわれた」とあるのは、聊か曖昧な見解で「初年」をどこまでの範囲に見るつもりか知らぬが、実は昭和四年刊の「かくし言葉の字引」(宮本光玄著)に既に見えてゐる。また、昭和六年か七年の改造社版の「最新百科社会語辞典」にも見えてゐるから、文献上は佐々木邦の「珍太郎日記」の大正十年のを早い例として、もすこし溯りうるものであらうと想像されるものである。私は、佐々木邦の全集を読みながら、少年時代の読書と、今の私の読書とが、大へんに異なつて来たことを、特に不思議ともまた不自然とも思はないけれども、何か因縁の深いやうに思はれるものがあるのを感じる。

この全集を読みながら舶来語採集をしてゐると、辞典編修の路の険しさを感じつゝ、しかも無限の底の深さを想ふ。素朴に家庭諧謔小説を味ふ境地を失つてゐながら、今日なほこのやうな作品にも、また別の作品にも、プロフ・ッショナルな意識をもつて繰返し次々と立むかふことができるのを、むしろ幸ひだと思ひたいのである。

たいともおっしゃっていました。ドゾヨロシク!!

住所変更

- 鹿野 正子 千六三四 榎原市見瀬町二一九ノ四榎原ニュータウン
- 堀内 久美子 千一五七 世田谷区祖師谷三ノ四〇ノ一二 第五工区内
- 林 節子 千一六七 杉並区萩窪四ノ二二ノ一八 佐藤荘
- 牧野 由紀子 千二七八 鎌倉市西鎌倉一ノ四ノ一八
- 土方 美佐子 千一五六 世田谷区桜上水一の十五の十一
- 長浜 宏子 千一八四 小金井市梶野町三ノ三ノ三十三
- 小松 三千子 千一五八 世田谷区上用賀四ノ三五ノ十二ノ五〇三
- 若葉 東雄 千一五六 世田谷区大原二ノ二七ノ八

編集後記

いつに変わらぬ先生方の御好意を深く感謝致しております。

号を重ねて、もう八号になりました。よくここまで続いてきたと感慨深く思うと共に、今後も皆様の御協力

近藤 由紀子

をお願い致します。それについても、ミッチとオジ。Iの陰の努力は並大抵のものではありません。一人でも多くの方が、編集の折には御参加下さり、学生時代に戻って、楽しく一時の語らいを持つてはありませんか。大変良いストレス解消になりますよ。

佐藤 美智世

最終編集を終らせる夜、外は梅雨の終りを告げるような雨が降っている。こんなに遅くなってしまっし訳ありませんでした。育児が楽になればと思っていたら、やはり次々といるんな事があり、「花信風」を続けることも年々難しくなってきたというのが本音です。原稿集めに苦心して、印刷代の値上りで、今度は頁減らしに苦心して、やっと出来上りました。編集とは、報われぬ宿命をもつ縁の下の力もちであるという言葉をきいたことがあります。「反応」があった、はじめて血の通う雑誌となるのです。

林 節子

第八号をお送りします。ずい分遅れてしまいました。特に、早速に原稿を送ってくださいました先生方には、申し訳なく思っています。一人でも多く載せたいと思

う気持と経済的な事とが上手くゆかず苦労しました。多めにご送金くださった方に感謝します。それでも印刷代の値上りに追いつけず、原稿を出来るだけつめて載せましたので、イメージが変わってしまったとご不快の方もあると思いますがお許しください。もっと編集の勉強をしなければと反省しています。気がついた事を 教えてください。

花信風第八号

昭和五十年七月発行

発行責任者 佐藤 美智世

近藤 由紀子

林 節子

印刷 野本印刷